

語彙部門廃止の功罪
— 語彙的複合動詞をめぐる — *

永野 大夏

大阪大学大学院 / 日本学術振興会特別研究員

(nagano.taika@gmail.com)

2026年5月30日(土)

第51回 関西言語学会 ワークショップ

『生成統語論とそのインターフェイス：最適な言語設計を目指して』

1 はじめに

- 近年の極小主義プログラムでは、Strong Minimalist Thesis (SMT) のもとで、言語の計算体系を可能な限り単純なものとして捉えることが目指されている (Chomsky 2001, 2008, 2021, Chomsky et al. 2023, Chomsky 2025).
- SMT の観点からは、Merge 以外の構造構築操作や独立した文法部門の存在は慎重に検討されるべき対象となる。
- 特に、生成文法で伝統的に仮定されてきた Lexicon (語彙部門) は、現在でもその位置づけが必ずしも明確ではない。
- 語彙主義的な理論では、語形成や語彙意味の変化は統語部門とは独立した語彙部門で行われると考えられてきた (Aronoff 1976, Selkirk 1982, Kiparsky 1982, Jackendoff 1997, 2002, 影山 1993).
- 一方で、分散形態論をはじめとする反語彙主義的な理論では、語形成も統語演算の一部として扱われる (Halle and Marantz 1993, Harley and Noyer 1999, Embick and Noyer 2008, Bobaljik 2017).
- このような対立は、「最適な言語設計」において Lexicon がどのような性質を持つべきかという問題と密接に関係している。
- 本発表では、日本語の語彙的複合動詞をケーススタディとして取り上げる。
- 語彙的複合動詞は、従来語彙部門で形成されると考えられてきた一方で、近年では統語的に派生する分析も提案されている (Nishiyama 1998, 2008, 田中 2024).
- また、V1 と V2 の間には〈並列関係〉〈付帯状況・様態〉〈手段〉〈因果関係〉など多様な意味関係が存在することが指摘されている (由本 2005, 影山 2013a,b, 2021).
- 本発表では、生成的な語彙部門を仮定しない場合に、これらの意味関係をどの程度まで説明できるかを検討する。

- 本発表では、語彙的複合動詞における V1 と V2 の意味関係は、語彙部門ではなく語根複合を担う機能範疇 v^+ (田中 2024) の意味論的バリエーションによって導出できると主張する。
- 特に、〈手段〉・〈因果関係〉を表す v_{caus}^+ と、〈付帯状況・様態〉を表す v_{man}^+ を提案する。

* 本発表内容については、由本陽子氏、立野寛太氏より貴重なご助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

- 一方で、語彙部門を廃止した分析では、V1・V2 の下位範疇素性や格素性の継承といった語彙的性質を十分に説明することは難しい。
- 語彙的複合動詞は、語彙部門の縮小・廃止による理論的利点とその限界の両方を示す現象である。

本発表の構成

- §2 理論的背景
 - Strong Minimalist Thesis (SMT) と Lexicon をめぐる議論を概観する。
 - 語彙主義と反語彙主義の対立について整理する。
- §3 語彙的複合動詞をめぐって
 - 日本語の語彙的複合動詞の特徴を概観する (影山 1993)。
 - 語彙主義的分析および分散形態論による分析 (Nishiyama 1998, 2008) を紹介する。
 - V1 と V2 の意味関係について整理する (由本 2005)。
- §4 語彙部門廃止の試みとその功罪
 - 語彙部門を仮定しない分析の可能性を検討する。
 - 語根複合を担う v^+ (田中 2024) の意味論的バリエーションを提案する。
 - その経験的利点と問題点を議論する。
- §5 まとめ
 - 本発表の主張をまとめる。
 - 「最適な言語設計」における Lexicon の位置づけについて考察する。

2 理論的背景

2.1 Strong Minimalist Thesis (SMT)

- 言語理論は、言語の Learnability, Evolvability, Universality と整合がないといけない。
- (1) [A] genuine explanation is achieved only if it keeps to mechanisms that satisfy the conditions of learnability, evolvability, and universality. (Chomsky et al. 2023:12)
- Learnability:** the theory must account for how a child can, through the interaction of the innate language faculty and the environment, grow an I-language [...]
 - Evolvability:** the innate computational system must have emerged in accord with the conditions on the evolution of Homo sapiens.
 - Universality:** the innate system must accommodate all possible languages while barring all impossible ones (Chomsky et al. 2023:11)
- 言語（機能）は「音」と「意味」を結びつけるシステムであり、それは最適性を有する。
 - Strong Minimalist Thesis (SMT)

- (2) [The Strong Minimalist Thesis (SMT)] holds that language is an optimal solution to interface conditions that [Faculty of Language (FL)] must satisfy [(=“legibility conditions”, (Chomsky 2001:1))]. [...] language is an optimal way to link sound and meaning, [...]
(Chomsky 2008:135)
- 「言語 (language)」 = 個々の話者の言語機能の状態としての I 言語
- (3) [T]he closest approximation to the informal notion “language” is a state of FL, an I-language.
(Chomsky 2008:133)
- 言語の計算体系は SMT に (できる限り) 忠実に従う (Principle S).
- (4) S. The computational structure of language should adhere as closely as possible to SMT.
(Chomsky 2025:19)
- 言語 (機能) により, ヒトは有限個の要素を階層的に組み合わせて, 無限に多様な言語表現を生成することができる.
- (5) [T]he most elementary property of language [...] is that it is a system of discrete infinity consisting of hierarchically organized objects.
- SMT の帰結として, Merge が最も最適な構造構築操作 (SOB) であり, それ以外の操作は削減されることが望ましい.
- (6) a. [C]onformity to SMT requires that the structures of I-language are generated by the simplest operations.
b. Merge must take the simplest possible form, and the number of additional structure-building operations should be minimized (ideally, entirely eliminated).
(Chomsky et al. 2023:12)

2.2 Lexicon

- 生成文法はいくつかのモデルチェンジを経験してきたが, どのモデルにおいても計算の出発段階において Lexicon が仮定されてきた.
 - Chomsky (2021) 等でも, 言語演算で用いられる最小単位の要素 (LI) の集合として Lexicon が仮定されている.
 - しかし, その Lexicon の性質は謎が多い (生成統語論ではあまり議論されない).
- (7) The atomic elements [(= lexical items)] pose deep mysteries. The minimal meaning-bearing elements of human languages—wordlike, but not words—are radically different from anything known in animal communication systems. Their origin is entirely obscure, posing a very serious problem for the evolution of human cognitive capacities, language in particular.
(Berwick and Chomsky 2016:90)
- 近年の Chomsky の論考でも, Lexicon に対して厳密な定義がなされているとも言い難い.
 - 「意味」と「音」が対応する最小の単位の集合という, 直感的な定義しかされていない.
 - Lexicon は, 最小限の意味を含んだ要素と機能範疇の集合である.

(8) [The lexicon] is the set of ‘formatives’ in the traditional sense: minimum ‘meaning-bearing’ and functional elements. (Chomsky 2021:14)

- 一方で、LI は解釈と外在化（音形の具現化）に必要な十分な情報を含む。

(9) [...] each [lexical item] contains enough information to determine how it is externalized and how it is interpreted by other cognitive systems (its ‘meaning’). (Chomsky 2021:15)

- つまり、Lexicon に含まれる LI の数は必要最小限であり、LI には解釈や音声化のための十分な情報量がある。

2.3 語彙主義と反語彙主義

- そもそも、Lexicon という用語は二義的である。
 - いわゆる「単語」の貯蔵庫
 - 統語部門の原理・原則とは異なる規則が適用されるレベル（語彙部門，the Lexicon）
- 大なり小なり¹，語彙部門を仮定するアプローチを「語彙主義（lexicalist）」という²。

(10) [Lexicalism is] the belief in a component responsible for the production of (some) words whose rules and mechanisms function differently from the rules which govern phrase structure[.] (O’Neil 2016:243)

- Aronoff (1976) などを除き，基本的に生成文法では（意味と形式の最小対としての）形態素を基盤としている。
 - 形態素に対して語形成規則などを適用することによってさまざまな語が派生される。
- したがって，生成文法でいう Lexicon とは，形態素（語彙項目）の集合とそれを対象にする操作群のことである。その操作が行われる部門が語彙部門という位置付けである。
- 一方で，語彙項目における「意味」をどのように解釈するかは様々な見解がある。
 - Levin (1985) は述語の LI に関しては項構造と語彙概念構造（LCS）を持つとしている。
 - また，Pustejovsky (1995) に端を発する生成語彙論では，LI はより多くの情報（クオリア構造や事象構造）を含むものとされている。
 - 豊富な情報を含む LI とそれに対して意味合成規則等が適用され，派生や複合語等に見られる語彙意味の変化をダイナミックに捉えることができる。
- 初期の極小主義（Chomsky 1995）においても語彙主義的な見解が取られていた。
 - 屈折形態論は，素性照合のシステムを前提とすると統語派生（一致）前に LI に含まれている必要がある。
- それに台頭する形で，形態論を語彙部門ではなく統語部門に分散させる反語彙主義という考えが

¹ 語彙部門がどの程度の「強さ」を持つかは理論枠組みによってかなり異なる。語彙主義の形態理論でも，例えば派生形態論と屈折形態論の扱いが均一ではない。Kiparsky (1982), Jackendoff (1997, 2002) 等では派生形態論も屈折形態論も語彙部門の中で扱われる（強い語彙主義）一方で，Anderson (1992) では，語彙素を仮定した上で屈折は syntax が要求する情報を語形に反映する規則として扱う（弱い語彙主義）(de Chence 2025)。影山 (1993) 等のモジュール形態論でも，語彙部門で派生される語と統語部門で派生される語を明確に認めている点「弱い語彙主義」を採用していると言える。

² 一言に語彙主義といっても形態素を基盤とするか，語彙素（lexeme）を基盤とするかで大きく異なる。例えば前者は接辞も内容語と同列の扱いを受けるのに対して，後者では接辞は語彙素に対する形態操作の結果として現れたものという副次的な扱いである。この議論に関しては，O’Neil (2016) や西山・長野 (2020) に概説されている。

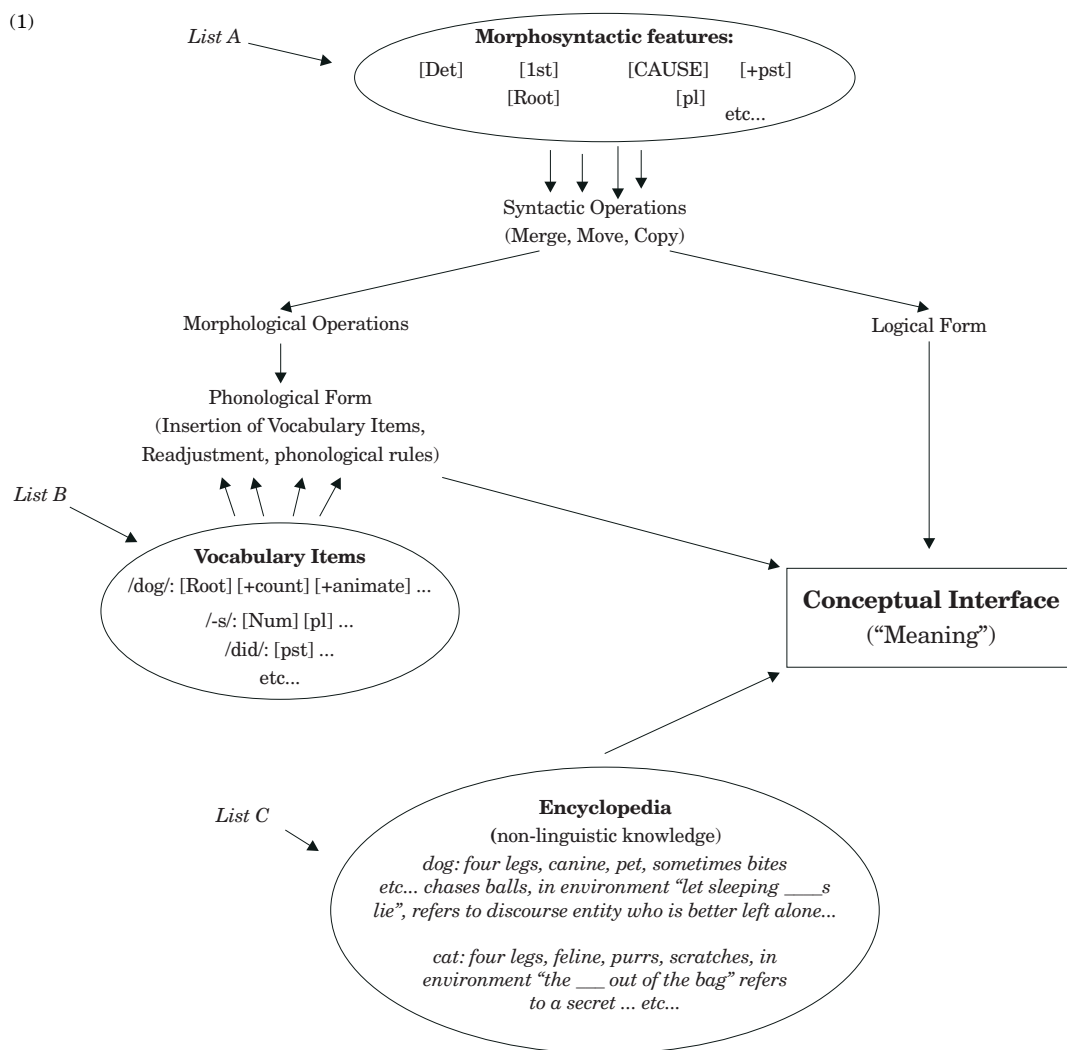


図 1: 分散形態論の文法アーキテクチャー (Harley and Noyer 1999:3)

生まれた³。代表的な反語彙主義の理論として分散形態論 (Halle and Marantz 1993, Harley and Noyer 1999, Embick and Noyer 2008, Embick 2015, Bobaljik 2017, a.o.) がある。

－ 図 1 は分散形態論の文法アーキテクチャーである。

- 分散形態論では、語彙部門で行われてきた操作は 1 つの部門ではなく複数のレベルで行われる。
- (11) [...] the machinery of what traditionally has been called **morphology** is not concentrated in a single component of the grammar, but rather is distributed among several different components. (Halle and Marantz 1993:111–2)
- (12) [...] “word formation”—the creation of complex syntactic heads— may take place at any **level of grammar** through such processes as head movement and adjunction and/or merger of structurally or linearly adjacent heads. (Halle and Marantz 1993:112)
- 従来語彙部門で考えられていた操作は統語論として扱われる。つまり、Merge は句レベルではな

³ 細かな理論変遷の経緯については 大関 (2023) で概説されている。

く語レベルに対しても適用される操作である。

(13) **Syntax-all-the-way-down:** The primary mode of meaningful composition in the grammar, both above and below the word level, is the syntax. Syntax operates on sub-word units, and thus (some) word-formation is syntactic. (Bobaljik 2017:2)

- 分散形態論を特徴づけるのは Late Insertion である。
 - Lexicon に貯蔵されている LI は音声情報を持たず、統語操作を経てから音声情報を得る。
- (14) **Late Insertion or Realization:** The pieces manipulated by the syntax (*functional morphemes*) are abstract, lacking phonological content. The pairing of phonological features with the terminals of the syntax (*vocabulary insertion* or *exponence*) happens post-syntactically, in the mapping from syntax to phonological form (PF). (Bobaljik 2017:2)
- 音声情報が含まれない統語論で用いられる原子の貯蔵庫は Pure Lexicon (List A) と呼ばれる。
 - Pure Lexicon には、機能範疇と最小限の語彙意味を持った語根 (Root) が含まれる。
- Pure Lexicon の要素に対する音声情報の集合を Vocabulary (List B) といい、統語論後に統語構造を PF に送る前に参照される。
- 言語外知識の集合として Encyclopedia (List C) が假定されている⁴。
- このように分散形態論では、語彙部門で假定されていた操作は全て統語操作に還元され、LI に想定されていた豊かな情報は統語前・音形決定時・意味解釈時の3段階で参照される個別のリストに還元された。

まとめ：SMT と Lexicon

- Lexicon という用語は、「単語」の貯蔵庫を指すとともに、統語部門とは独立した生成部門 (語彙部門) のことも指す。
- 語彙部門を假定する語彙主義と、假定せずに全て統語部門に一本化する反語彙主義が存在する。
- Chomsky (2021) 等で Lexicon についての言及はあるものの、詳細には議論されていない。
- 「最適な言語設計」における Lexicon とはどのようなものだろうか？

3 語彙的複合動詞をめぐって

- 統語部門と語彙部門の区別について、Chomsky (1970) 以来盛んに論じられてきた。
- 例えば、動名詞句は変形 (統語部門) によって形成されるが、動詞由来派生名詞はその前 (語彙部門) に派生される。
 - (15a) にみられるような、派生名詞 (refusal) は統語部門には名詞の状態を導入される。
 - * 統語部門では名詞なので格付与能力を持たないため内項 (the offer) は前置詞付きで表現される。
 - (15b) の動名詞は統語部門で派生される。

⁴ 生成語彙論ではこのような言語外知識についても LI に含まれている。

* 動詞として統語部門に導入されるので格付与能力を持つ。

(15) a. John's refusal of the offer

b. John's refusing the offer

- 日本語の V-V 型複合動詞にも同様の議論（統語部門 vs. 語彙部門）がみられる。
 - 日本語の V-V 型複合動詞は 影山 (1993) 等で指摘されている通り、語彙部門で派生されるもの（語彙的複合動詞）と統語部門で派生されるもの（統語的複合動詞）の 2 種類が考えられる。
- 本節では、語彙的複合動詞を分析した先行研究を紹介し、由本 (2005) などで指摘されている V1 と V2 の意味的結びつきについて概観する。

3.1 日本語の V-V 型複合動詞⁵

- 日本語には動詞と動詞を組み合わせた複合語が豊富に見られる。
 - 前の動詞を V1, 後の動詞を V2 と呼ぶ。
 - 形式上は V1+V2 だが、V1 と V2 の接合関係と意味関係にバリエーションがあることが指摘されている。
 - ただしそのバリエーションも無作為に存在するわけではなく、規則性が観察される。
 - 大きくは、2つの動詞の結合度（統語的振る舞い）で、語彙的複合動詞と統語的複合動詞に大別される。
- (16) a. **語彙的複合動詞**：飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け継ぐ、解き放つ、飛び込む、(隣の人に) 話かける、こびり付く、飲み歩く、歩き回る、踏み荒す、誉め讃える、語り明かす、聞き返す、震え上がる、呆れ返る、持ち去る、沸き立つ、...
- b. **統語的複合動詞**：払い終える、話し終える、しゃべり続ける、食べすぎる、食べそこなう、助け合う、動き出す、食べかける、しゃべりまくる、走り抜く、数え直す、見慣れる、登り切る、やりつける、... (影山 1993:75-6)
- まず、統語的複合動詞では VIP を照応形で置き換えることが可能であるが、語彙的複合動詞では不可能である。
- (17) a. 太郎が [VP 泳ぎ] 続けているのを見て、次郎も [VP そうし] 続けた。
- b. *太郎が [VP 飛び] 上がったのを見て、次郎も [VP そうし] 上がった。
- 受け身の形態素「られ」についても、統語的複合動詞に関しては V1 の後に来ることが可能だが、語彙的複合動詞は V2 の後にしか付着できない。
- (18) a. 最近小学生もパソコンを使い出した
- b. 最近小学生にもパソコンが {?使い出された / 使われ出した}
- (19) a. おじいさんがパソコンを部屋から運び出した。
- b. パソコンが部屋から {運び出された / *運ばれ出した}
- 同様に、統語的複合動詞では、V1 のみの主語尊敬化が可能である。
- (20) a. 先生が論文をお書きになり始めた
- b. 先生が論文にメモをお書きになり込んだ (お書き込みになった)

⁵ 本節は例文等一部、由本他 (2024: 12 章) に準拠する。

- なぜ同じ「動詞+動詞」の形式なのに、統語的振る舞いが異なるのか？
 - 複合されている部門が異なる (影山 1993).
 - 統語的複合動詞は統語部門で形成される。一方、語彙的複合動詞は統語部門前の語彙部門で形成されているため、統語部門では1つの動詞 (V) として振る舞う。
 - 影山 (1993) は統語的複合動詞は V1 が V2P を補文⁶にとる構造をしていると分析した。
 - V2 が補助動詞的な役割をしている。つまり、意味的には V1 が中心である。
 - 語彙的複合動詞は、V1 と V2 の意味関係が多様である (由本 2005)。
 - 中でも V2 が意味的な主要部を果たしているものが多い (21b-d).
- (21) a. V1 と V2 が並列関係：泣き叫ぶ、妬み嫌う、...
- b. V1 が V2 の付帯状況・様態を表す：遊び暮らす、すすり泣く、降り注ぐ、...
- c. V1 が V2 の手段を表す：蹴り倒す、言い負かす、切り開く、...
- d. V1 が V2 の原因を表す：溺れ死ぬ、流れ着く、着膨れる、飲みつぶれる、...
- e. V1 が V2 に埋め込まれた構造：書き落とす、聞き漏らす、...
- f. V2 が V1 を副詞的に補強：晴れ渡る、咲き乱れる、...
- 語彙的複合動詞の V1 や V2 も、不規則に合成しているわけではなく、一定の規制がある。
 - 「項の同定⁷」の際の「他動性調和の法則」がその1つである。
- (22) 他動性調和の原則：語彙的 V-V 複合語において、V1 と V2 は同じタイプの項構造 (外項の有無) を持つ。 (影山 1993:117)
- a. *非対格+非能格：転び駆る、痛み泣く、崩れ降りる、明け暮らす
- b. *非対格+他動詞：売れ飛ばす、ゆれ起こす、崩れ落とす、落ち崩す
- c. *非能格+非対格：泣きはれる、走りころぶ、跳び落ちる
- d. *他動詞+非対格：洗い落ちる、ぬぐいとれる、切り崩れる、植え生える
- V1 と V2 の意味的關係のバリエーションについては §3.3 で詳細に検討する。

3.2 分散形態論による語彙的複合動詞の分析 (Nishiyama 1998, 2008)

- Nishiyama (1998, 2008)：語彙的複合動詞も統語的に派生
- (23) a. ジョンがビルを押し倒した。
- b. *ジョンがビルを [押し] 倒し、メアリーがハナを [そうし] 倒した。
- c. ビルがジョンに { 押し倒された / *押され倒した }
- 語彙的複合動詞は (24) のように、Serial Verb Construction を形成する。
 - V1P と V2 が Merge し、V2P が vP と Merge する。
 - 内項はそれぞれの V が導入し、V1 の内項は PRO である。
 - * (24a) の V1 「押す」は他動詞のため内項は PRO を導入する。
 - 外項は v によって導入される。
 - * 主語の義務的同定 (Matsumoto 1996, 由本 1996)

⁶ 補文のタイプにも Raising と Control が指摘されているが本発表では割愛する。

⁷ 動詞が項構造を持つという仮定のもとでは、複合動詞が形成される前の動詞にもそれぞれ項構造がある。語彙部門で語彙的複合動詞が形成される際、それぞれの動詞の項構造が一本化されるのを項の同定という。

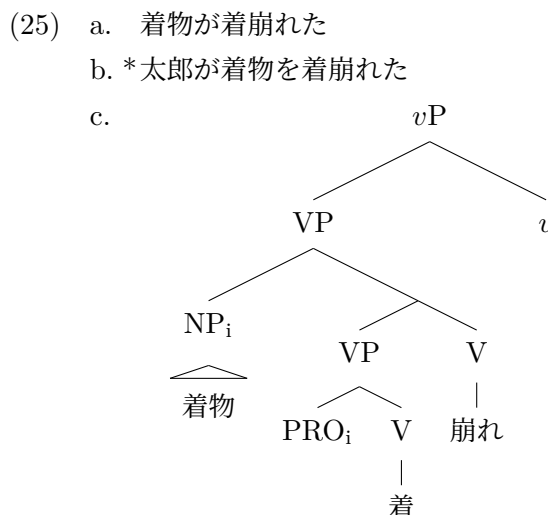
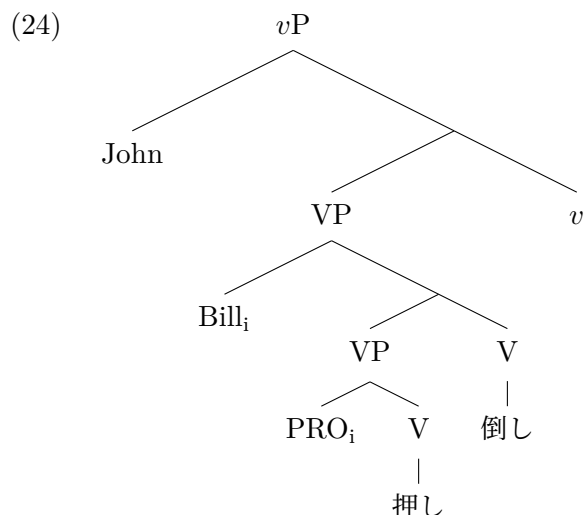
– V1 は後に V2 に編入 (Baker 1988) する.

- Nishiyama (1998, 2008) は V-V 複合動詞の統語的主要部は V2 であると主張する.

– V2 の性質によって, v の性質 (外項の有無) が変化する.

– 例えば (25) の「着崩れる」は「着る」(他動詞)と「崩れる」(非対格)の複合語だが, V2 の性質 (非対格) により v は外項を導入しない.

* V2 「崩れる」が非対格で外項が導入されないため (25b) は非適格となる.



- 項の同定に関しては, 内項に関しては PRO, 外項に関しては v の性質によって導出される.

– 語彙部門での項の同定と他動性調和の原則の廃止

- しかし, (24) のような構造を仮定した場合, V1 もしくは V2 一方のみの下位範疇素性や格素性が受け継がれているケースを説明するのは難しい.

– つまり, V1 の内項が PRO によって V2 の内項と同一指標であると考えられないケースである.

- Matsumoto (1996), 由本 (1996) などで指摘されている通り, 外項は V1 と V2 の主語が義務的に同定されている必要があるが, 内項の具現化に関してはバリエーションが見られる.

(26) 「連れ去る」: V1 の下位範疇素性がアクティブ

- 太郎が保育所から子供を連れ去った
- 太郎が子供を連れていた
- *太郎が子供を去った

(27) 「言い負かす」: V2 の下位範疇素性がアクティブ

- 太郎が先生を言い負かした
- *太郎が先生を言った
- 太郎が先生を負かした

- また, V1 と V2 の格素性の受け継ぎにもバリエーションがある.

- (28) 「歩き慣れる」：V1 の格素性がアクティブ
- 太郎は砂漠 {を/*に} 歩き慣れている
 - 太郎が砂漠 {を/*に} 歩く
 - 太郎が砂漠 {*/を/に} 慣れている
- (29) 「乗っ取る」：V2 の格素性がアクティブ
- 政権 {を/*に} 乗っ取った.
 - *電車 {*/を/に} 乗った
 - 政権 {を/*に} 取った
- (30) の「締め殺す」のような例の場合，V1 が lexical saturation (Zubizarreta 1987) を受け，語彙意味の中で内項が典型的なものとして解釈されている。
- (30) a. 太郎は鶏を絞め殺した
 b. ?太郎は鶏を絞めた ((鶏の) 首を絞めた)
 c. 太郎は鶏を殺した
- 先にみた「言い負かす」は，V2 の内項が lexical saturation を受けていると言える。
- (31) a. 太郎は先生を言い負かした
 b. *太郎は先生を言った (「意見」を言った)
 c. 太郎は先生を負かした
- これらのように，V1 と V2 の項構造や下位範疇素性，格素性のミスマッチは，内項をコントロールした統語構造による説明は難しい。

3.3 語彙的複合動詞の意味

- 本発表では特に，影山 (2013a,b, 2021) の主題関係複合動詞における V1 と V2 の意味関係について検討する⁸。
 - 主題関係複合動詞の V1 と V2 には，以下 (32) の意味関係が指摘されている。
 - * 語彙的複合動詞における V1 と V2 の意味関係は，それぞれの語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure, LCS) の合成パターンによって捉えられる (由本 2005)。
- (32) a. 並列関係：[LCS1 AND LCS2]
 b. 付帯状況・様態： $\left[\begin{array}{l} \text{LCS2} \\ \text{WHILE LCS1} \end{array} \right]$
 c. 手段： $\left[\begin{array}{l} \text{LCS2} \\ \text{BY LCS1} \end{array} \right]$
 d. 因果関係： $\left[\begin{array}{l} \text{LCS2} \\ \text{FROM LCS1} \end{array} \right]$
- (32) の4分類は V1 と V2 の表す出来事の時間関係によって2分される。
 - 並列関係，〈付帯状況・様態〉：V1 と V2 の出来事は同時

⁸ アスペクト複合動詞 (L-asp)，すなわち V1 と V2 が「補文関係」(V1 が V2 に埋め込まれている関係) と「副詞的關係」(V2 が V1 を修飾している関係) にあるものは本発表では扱わず，今後の課題としたい。

- 〈手段〉, 〈因果関係〉: V1 の出来事は V2 の出来事より前に起こる
- 〈付帯状況・様態〉, 〈手段〉は生産性が高く, 〈並列関係〉と〈因果関係〉は生産性が低い。
- まず, 「泣き叫ぶ」のような〈並列関係〉を表すものは, 同じ関数を持つ LCS が AND によって等位接続されることによって生成される。
- (33c) にあるように, 単純な事象構造として再分析されるため, すべての変項が同定される必要がある。
- 等位接続なので, アスペクト素性も結合されている必要もある。

(33) 並列関係: [LCS1 AND LCS2]

- a. 泣き叫ぶ
 - b. $\overbrace{[[[x_i] \text{CONTROL} [[y_i] \text{CRY}]]]}$ AND $\overbrace{[[[x_i] \text{CONTROL} [[y_i] \text{SHOUT}]]]}$
 - c. $\Rightarrow [[x_i] \text{CONTROL} [[y_i] \text{CRY AND SHOUT}]]$
- V1 と V2 が同時に起こる出来事である点は〈並列関係〉と同様だが, 〈付帯状況・様態〉の場合は結合にかかる制約が緩い。
 - LCS1 が LCS2 に従属する形で WHILE で合成される。
 - 内項に関しては, 同じ意味役割を持つものの中で同定が行われる。
 - しかし, 同定されずに残った内項が複合語の項として受け継がれることもある。
 - 例えば (34b,c) の y は同定されていないが, 「持ち寄る」の目的語として統語部門で具現化される。
 - V1 は原則継続相を表す。

(34) 付帯状況・様態: $\left[\begin{array}{c} \text{LCS2} \\ \text{WHILE LCS1} \end{array} \right]$

- a. 持ち寄る
 - b. $\overbrace{[[[x_i] \text{CONTROL} [[y_j] \text{BE} [\text{WITH} [z_i]]]]]}$ + $\overbrace{[[x_i] \text{CONTROL} [[y_i] \text{GO TOGETHER}]]}$
 - c. $\Rightarrow \left[\begin{array}{c} [[x_i] \text{CONTROL} [[y_i] \text{GO TOGETHER}]] \\ \text{WHILE} [[x_i] \text{CONTROL} [[y_j] \text{BE} [\text{WITH} [z_i]]]]] \end{array} \right]$
- 〈手段〉は, 意図性を持つ動詞同士の組み合わせに限られる。
 - すなわち, V1 も V2 も LCS に CONTROL を持つ
 - 主語 (動作主) は必ず同定されるが, 内項に関しては (31) の「言い負かす」ように V1 と V2 のどちらか一方のみしか具現化されない場合もある。
 - 直接内項は意味役割が異なっても同定される必要がある。
 - 「嘸み付く」の場合, 「嘸む」の対象と「付く」の着点 (y_j) が同定されている。

(35) 手段： $\left[\begin{array}{l} \text{LCS2} \\ \text{BY LCS1} \end{array} \right]$

a. 嘸み付く

b. $\left[\overbrace{[[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ ACT ON } [y_j]]]]}^{\text{「嘸む」の LCS}} \right] +$
 $\left[\overbrace{[[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ CAUSE } [\text{ BECOME } [[x_i] \text{ BE } [\text{ AT } [y_j]]]]]]}^{\text{「付く」の LCS}} \right]$

c. $\Rightarrow \left[\begin{array}{l} [[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ CAUSE } [\text{ BECOME } [[x_i] \text{ BE } [\text{ AT } [y_j]]]]]]] \\ \text{BY } [[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ ACT ON } [y_j]]]] \end{array} \right]$

- 意図性を伴わない原因を表す場合が〈因果関係〉である。
- V2 は非意図的事象を表す非対格自動詞に限られる。
- 意味役割の違いに関わらず第一項は必ず同定される。

(36) 因果関係： $\left[\begin{array}{l} \text{LCS2} \\ \text{FROM LCS1} \end{array} \right]$

a. 寝静まる

b. $\left[\overbrace{[[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ ACT }]] }^{\text{「寝る」の LCS}} \right] +$
 $\left[\overbrace{[\text{ BECOME } [[x_i] \text{ BE } [\text{ AT } [\text{QUIET}]]]]]}^{\text{「静まる」の LCS}} \right]$

c. $\Rightarrow \left[\begin{array}{l} [\text{ BECOME } [[x_i] \text{ BE } [\text{ AT } [\text{QUIET}]]]]] \\ \text{FROM } [[x_i] \text{ CONTROL } [[x_i] \text{ ACT }]] \end{array} \right]$

まとめ：主題関係複合動詞

- **並列関係** (e.g, 「泣き叫ぶ」)
 - V1 と V2 の出来事は同時に発生する。
 - AND によって同様の構造を持つ LCS 同士が等位接続される。
 - したがって、すべての変項が同定される。
- **付帯状況・様態** (e.g, 「持ち寄る」)
 - V1 と V2 の出来事は同時に発生する。(V1 は原則継続相)
 - LCS1 が LCS2 に従属する形で WHILE で合成される。
 - 同じ意味役割を持つ内項は同定されるが、同定されない内項は複合語の項として受け継がれる。
- **手段** (e.g, 「嘸み付く」)
 - V1 の出来事が原因で V2 の出来事が起こる
 - V1 も V2 も動作主を持つ動詞である。
 - 直接内項は意味役割が異なっても同定される必要があるが、同定されずに残った項は複合語の項として受け継ぐこともできる。
- **因果関係** (e.g, 「寝静まる」)
 - V1 の出来事が原因で V2 の出来事が起こる
 - V2 は非意図的事象を表す非対格自動詞に限られる。

- 意味役割の違いに関わらず第一項は必ず同定される。
- 項の同定に関して
 - 主語や第一項は必ず同定される。
 - 〈付帯状況・様態〉, 〈手段〉の場合, 同定されない内項が複合動詞の項として受け継がれることもある。

4 語彙部門廃止の試みとその功罪

- 本節では, LCS を想定した語彙主義的な先行研究を礎に, 反語彙主義的なフレームワークでの語彙的複合動詞の分析の再現を試みる。
 - 分散形態論の枠組みでの語彙的複合動詞の研究では, あまり V1 と V2 の意味関係についてはほとんど論じられてこなかった。
- 本発表では, 生成的なレキシコンを仮定しない前提において, どの程度まで V1 と V2 の意味関係を説明できるかを試みる。

4.1 「最適な言語設計」における Lexicon とは？

- Chomsky (2021, 2025) 等で仮定されている統語演算は図 2 のようなものである。
- Lexicon (LEX) より必要な LI を Workspace に取り出す。
- WS 内の要素 (Syntactic Objects, SO) P, Q から (非順序) 集合 {P, Q} を作り, 新たな WS (WS') が出力される⁹。

(37) $\text{Merge}(P, Q, \text{WS}) = \text{WS}' = \{P, Q, \dots\}$ (Chomsky et al. 2023:27)

- 派生のある段階で SO は転送 (Transfer) され, 概念・意図システム (Conceptual-Intentional, CI) と感覚運動システム (Sensory-Motor, SM) に送られ解釈・外在化を受ける。
- LEX の中でなんらかの操作が行われているか否かについての言及はない。

(38) I-language is a computational system. Any such system has primitive elements and computational procedures to form new elements. In our case, the primitives constitute the lexicon (LEX), atoms of computation for I-language, though (like atoms) they have internal structure that enters into other processes. (Chomsky 2021:14)

- したがって, 図 2 のような言語演算システムの中では語彙部門は仮定されていないと捉える。
- 本発表の目的は, 「最適な言語設計」を図 2 のようなものと仮定した場合, 従来は語彙部門の存在によって説明できた現象をどの程度まで説明できるかを検証する試みである。

⁹ WS に対して適用される Merge は, 従来の SO 同士のみでの Merge と区別されて Chomsky (2021) 等では MERGE と記されるが, 本発表ではその区別は行わない。

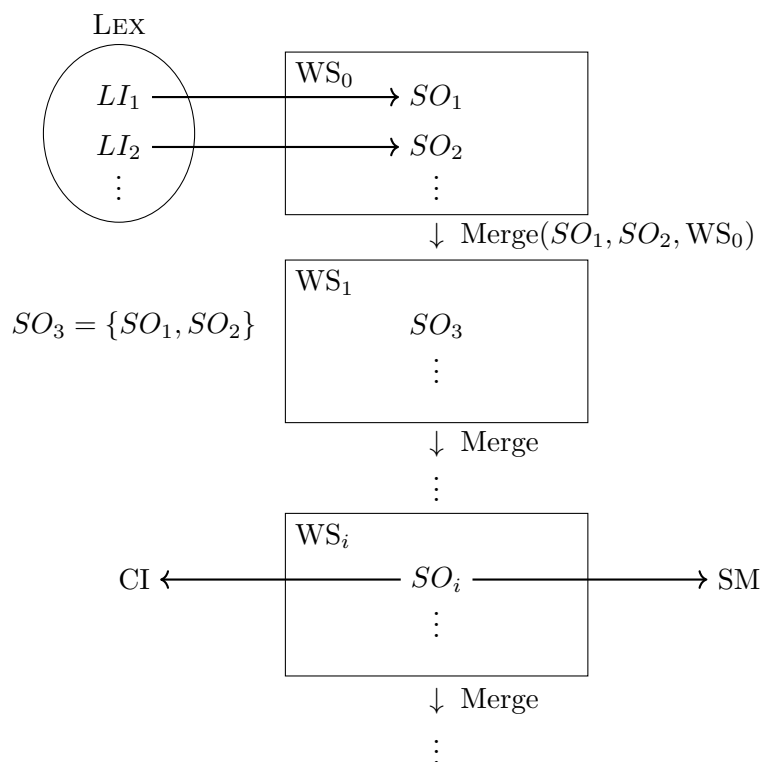


図 2: 統語演算の模式図

4.2 語彙的複合動詞の意味構成

4.2.1 田中 (2024)

- 本発表では 田中 (2024) で提案された語彙的複合動詞の分析を礎に、語彙部門を仮定しない語彙的複合動詞の分析を検討する。
- 田中 (2024) は語彙的複合動詞は2つの語根が v^+ によって等位接続されることによって複合語化されると提案した。
 - 由本 (2005) などで指摘されている V1 と V2 の意味関係は等位接続から類推される。
- Nishiyama (1998, 2008) との違いは、内項を含めた項が語彙動詞から分離している点である (Carlson 1984, Lohndal 2014, Champollion 2017, Elliott 2020)。
 - 外項も内項も、語根が複合された後に導入される。
- 内項は v^* によって、外項は Voice*によって導入される。
 - それぞれの補部の性質によって項の導入の有無が決定される。
 - 例えば非能格自動詞の $\sqrt{\text{ROOT}}$ と v が Merge した際、その $\sqrt{\text{ROOT}}$ の性質により v を導入しない。
 - 同様に、非対格自動詞の vP と Voice が Merge した場合、Voice は外項を導入しない。
- 例えば、「押し倒す」は (40) のように分析される。

(39) ジョンがビルを押し倒す

(40)

a. $[[v^+] = \lambda P_{1\langle vt \rangle} . \lambda P_{2\langle vt \rangle} . \lambda e. [P_1(e) \wedge P_2(e)]$

b. $[[\sqrt{OS}] = \lambda e. [\text{push}(e)]$

c. $[[v'_1] = \lambda P_{2\langle vt \rangle} . \lambda e. [\text{push}(e) \wedge P_2(e)]$

d. $[[\sqrt{TAO}] = \lambda e. [\text{fall}(e)]$

e. $[[vP_1] = \lambda e. [\text{push}(e) \wedge \text{fall}(e)]$

f. $[[v^*] = \lambda P_{\langle vt \rangle} . \lambda x . \lambda e. [\text{Theme}(e) = x \wedge P(e)]$

g. $[[v'_2] = \lambda x . \lambda e. [\text{Theme}(e) = x \wedge \text{push}(e) \wedge \text{fall}(e)]$

h. $[[vP_2] = \lambda e. [\text{Theme}(e) = b \wedge \text{push}(e) \wedge \text{fall}(e)]$

i. $[[\text{Voice}^*] = \lambda P_{\langle vt \rangle} . \lambda x . \lambda e. [\text{Agent}(e) = x \wedge P(e)]$

j. $[[\text{Voice}'] = \lambda x . \lambda e. [\text{Agent}(e) = x \wedge \text{Theme}(e) = b \wedge \text{push}(e) \wedge \text{fall}(e)]$

k. $[[\text{VoiceP}] = \lambda e. [\text{Agent}(e) = j \wedge \text{Theme}(e) = b \wedge \text{push}(e) \wedge \text{fall}(e)]$

4.2.2 v^+ のバリエーション

- しかし、語根を等位接続するだけの意味論では、由本 (2005) で指摘されてきた V1 と V2 の意味関係を捉えることは難しい。
- 例えば、「押し倒す」のような〈手段〉を表すようなものは V1 が V2 の原因となるため V1 の表す出来事の方が V2 の表す出来事よりも前に発生している必要がある。
- V1 が V2 に従属するような意味関係は、V1 と V2 が等位接続で結ばれているだけでは説明が難しい。
- 等位接続ということは「 $A \wedge B \Leftrightarrow B \wedge A$ 」が成立するため、「*倒し押す」のような複合語が、少なくとも意味論の観点からでは問題がなくなる。

(41) ジョンがビルを { 押し倒した / *倒し押した }

- ほかにも、〈因果関係〉 (e.g., 溺れ死ぬ) や 〈付帯状況・様態〉 (e.g., 遊び暮らす) のような、V1 が V2 を意味的に修飾するようなケースではほとんどの場合 V1 と V2 を入れ替えることは不可能である。

(42) a. ジョンが { 溺れ死んだ / *死に溺れた }

b. ジョンは { 遊び暮らしている / *暮らし遊んでいる }

- もちろん、意味論以外の要因により、V1 と V2 の語順が固定されていることも考えうるが、本発表では V1 が V2 と意味的に等位接続でないことによるものしたい。
- V1 が V2 を意味的に修飾しているような語彙の複合動詞は、 v^+ によって単に等位接続されるとは考えずに、 v^+ にいくつかの変種を認め V1 と V2 の意味的結びつきにバリエーションを導出することを試みる。

4.2.3 手段、因果関係

- まず、〈手段〉と〈因果関係〉の関係の V1 と V2 は v^+_{caus} によって語根が複合されている。

(43) 手段, 因果関係

$$\llbracket v_{caus}^+ \rrbracket = \lambda P_{1\langle vt \rangle} \cdot \lambda P_{2\langle vt \rangle} \cdot \lambda e. \exists e_1, e_2 [P_1(e_1) \wedge P_2(e_2) \wedge e = e_1 \rightarrow e_2]$$

- これは, VV 複合語で表される1つの出来事 e は V1 の表すサブイベント e_1 と V2 の表すサブイベント e_2 によって構成されていることを表している.
- e_1 と e_2 は (44) にあるように使役関係となっている.

(44) *Event Composition Rule* (Ramchand 2008:44; cf. Hale and Keyser 1993)

$e = e_1 \rightarrow e_2$: e consists of two subevents, e_1, e_2 , such that e_1 causally implicates e_2 .

- $e = e_1 \rightarrow e_2$ によって, V1 (e_1) が V2 (e_2) の原因になっていることが表される.
- <手段> の「押し倒す」は (46) のように派生される.

(45) ジョンがビルを押し倒す

<p>(46)</p>	<p>a. $\llbracket v_{caus}^+ \rrbracket = \lambda P_{1\langle vt \rangle} \cdot \lambda P_{2\langle vt \rangle} \cdot \lambda e. \exists e_1, e_2 [P_1(e_1) \wedge P_2(e_2) \wedge e = e_1 \rightarrow e_2]$</p> <p>b. $\llbracket \sqrt{OS} \rrbracket = \lambda e [\text{push}(e)]$</p> <p>c. $\llbracket v_{caus}^+ \rrbracket' = \lambda P_{2\langle vt \rangle} \cdot \lambda e. \exists e_1, e_2 [\text{push}(e_1) \wedge P_2(e_2) \wedge e = e_1 \rightarrow e_2]$</p> <p>d. $\llbracket \sqrt{TAO} \rrbracket = \lambda e [\text{fall}(e)]$</p> <p>e. $\llbracket v_{caus}^+ P \rrbracket = \lambda e. \exists e_1, e_2 [\text{push}(e_1) \wedge \text{fall}(e_2) \wedge e = e_1 \rightarrow e_2]$</p> <p>f. $\llbracket v^* \rrbracket = \lambda P_{\langle vt \rangle} \cdot \lambda x. \lambda e [\text{Theme}(e) = x \wedge P(e)]$</p> <p>g. $\llbracket vP \rrbracket = \lambda e [\text{Theme}(e) = b \wedge \exists e_1, e_2 [\text{push}(e_1) \wedge \text{fall}(e_2) \wedge e = e_1 \rightarrow e_2]]$</p> <p>h. $\llbracket \text{Voice}^* \rrbracket = \lambda P_{\langle vt \rangle} \cdot \lambda x. \lambda e [\text{Agent}(e) = x \wedge P(e)]$</p> <p>i. $\llbracket \text{VoiceP} \rrbracket = \lambda e [\text{Agent}(e) = j \wedge \text{Theme}(e) = b \wedge \exists e_1, e_2 [\text{push}(e_1) \wedge \text{fall}(e_2) \wedge e = e_1 \rightarrow e_2]]$</p>
-------------	--

- また, 「溺れ死ぬ」のような<因果関係>も (48) のように v^+ によって複合された語根から意味関係が導出される.

(47) 太郎が溺れ死ぬ

<p>(48)</p>	<p>a. $\llbracket v_{caus}^+ \rrbracket = \lambda P_{1\langle vt \rangle} \cdot \lambda P_{2\langle vt \rangle} \cdot \lambda e. \exists e_1, e_2 [P_1(e_1) \wedge P_2(e_2) \wedge e = e_1 \rightarrow e_2]$</p> <p>b. $\llbracket v_{caus}^+ \rrbracket' = \lambda P_{2\langle vt \rangle} \cdot \lambda e. \exists e_1, e_2 [\text{drowning}(e_1) \wedge P_2(e_2) \wedge e = e_1 \rightarrow e_2]$</p> <p>c. $\llbracket v_{caus}^+ P \rrbracket = \lambda e. \exists e_1, e_2 [\text{drowning}(e_1) \wedge \text{die}(e_2) \wedge e = e_1 \rightarrow e_2]$</p> <p>d. $\llbracket v^* \rrbracket = \lambda P_{\langle vt \rangle} \cdot \lambda x. \lambda e [\text{Theme}(e) = x \wedge P(e)]$</p> <p>e. $\llbracket vP \rrbracket = \lambda e [\text{Theme}(e) = b \wedge \exists e_1, e_2 [\text{drowning}(e_1) \wedge \text{die}(e_2) \wedge e = e_1 \rightarrow e_2]]$</p> <p>f. $\llbracket \text{Voice} \rrbracket = \lambda P_{\langle vt \rangle} \cdot \lambda e [P(e)]$</p> <p>g. $\llbracket \text{VoiceP} \rrbracket = \lambda e [\text{Theme}(e) = b \wedge \exists e_1, e_2 [\text{drowning}(e_1) \wedge \text{die}(e_2) \wedge e = e_1 \rightarrow e_2]]$</p>
-------------	---

- 〈手段〉(46)と〈因果関係〉(48)の違いは動作主の有無によって導出される。
 - LCSでのBYやFROMの区別を用いずに v^+ に一本化されている。
 - LCSを用いた分析では外項も語彙動詞に含まれており、〈手段〉の複合動詞はCONTROLが含まれた動詞同士でしか起こらないと議論されていた(由本 2005)。
 - 田中(2024)などの分散形態論の枠組みでの語彙的複合動詞の分析では外項は動詞の複合が起きた後に導入される。
 - 意図性の有無による差異は v^+ ではなくそれより上のVoiceの性質により導出される。

4.2.4 付帯状況・様態

- 〈付帯状況・様態〉の語彙的複合動詞も、V1がV2を意味的に修飾している関係である。
- したがって、「*暮らし遊ぶ」のようにV1とV2を自由に入れ替えることはできない。
- 本発表では、〈付帯状況・様態〉の語彙的複合動詞は v_{man}^+ によって語根が複合されることにより意味関係が導出されることを提案する。

(49) 付帯状況・様態

$$\llbracket v_{man}^+ \rrbracket = \lambda P_{1\langle vt \rangle} \cdot \lambda P_{2\langle vt \rangle} \cdot \lambda e. \exists e_1, e_2 [P_1(e_1) \wedge P_2(e_2) \wedge e = e_1 \oplus e_2 \wedge \text{Manner}(e_1, e_2)]$$

- v_{caus}^+ と同様に、複合動詞の表す出来事 e は e_1 と e_2 のサブイベントからなると考える。
- 〈付帯状況・様態〉は e_1 と e_2 の同時性が指摘されている。
- $e = e_1 \oplus e_2$ は e が e_1 と e_2 から成る事象和であることを示す。

(50) *E(vent)-cumulation* (cf. Zimmermann and Amaechi 2025; Kratzer 2007; a.o.)

$e = e_1 \oplus e_2$: e is a complex plural event formed by the sum-formation of e_1 and e_2 .

- $\text{Manner}(e_1, e_2)$ は(51)のように定義し、 e_1 が e_2 の付帯状況・様態を表すことを保証する。

(51) $\text{Manner}(e_1, e_2) := e_1$ is a manner/accompanying subevent of the host event e_2 .

- 「遊び暮らす」は(53)のように派生される。

(52) ジョンが遊び暮らす

(53)

a. $\llbracket v_{man}^+ \rrbracket = \lambda P_{1\langle vt \rangle} \cdot \lambda P_{2\langle vt \rangle} \cdot \lambda e. \exists e_1, e_2 [P_1(e_1) \wedge P_2(e_2) \wedge e = e_1 \oplus e_2 \wedge \text{Manner}(e_1, e_2)]$

b. $\llbracket v_{man}' \rrbracket = \lambda P_{2\langle vt \rangle} \cdot \lambda e. \exists e_1, e_2 [\text{play}(e_1) \wedge P_2(e_2) \wedge e = e_1 \oplus e_2 \wedge \text{Manner}(e_1, e_2)]$

c. $\llbracket v_{man}^+ P \rrbracket = \lambda e. \exists e_1, e_2 [\text{play}(e_1) \wedge \text{live}(e_2) \wedge e = e_1 \oplus e_2 \wedge \text{Manner}(e_1, e_2)]$

d. $\llbracket v \rrbracket = \lambda P_{\langle vt \rangle} \cdot \lambda e [P(e)]$

e. $\llbracket vP \rrbracket = \lambda e. \exists e_1, e_2 [\text{play}(e_1) \wedge \text{live}(e_2) \wedge e = e_1 \oplus e_2 \wedge \text{Manner}(e_1, e_2)]$

f. $\llbracket \text{Voice}^* \rrbracket = \lambda P_{\langle vt \rangle} \cdot \lambda x. \lambda e. [\text{Agent}(e) = x \wedge P(e)]$

g. $\llbracket \text{VoiceP} \rrbracket = \lambda x. \lambda e. [\text{Agent}(e) = x \wedge \exists e_1, e_2 [\text{play}(e_1) \wedge \text{live}(e_2) \wedge e = e_1 \oplus e_2 \wedge \text{Manner}(e_1, e_2)]]$

4.2.5 まとめ

- 田中 (2024) は語彙的複合動詞は v^+ によって語根が複合されることにより統語的に形成されることを主張した。
- 本発表ではさらに、主題関係の語彙的複合動詞のうち、V1 が V2 に対して意味的に修飾しているようなもの (〈手段〉・〈因果関係〉, 〈付帯状況・様態〉) は、それぞれ v_{caus}^+ , v_{man}^+ によって語根が複合されることにより、V1 と V2 の意味関係が導出されると主張した。

$$(54) \quad \begin{aligned} \text{a. } & \llbracket v_{caus}^+ \rrbracket = \lambda P_{1\langle vt \rangle} . \lambda P_{2\langle vt \rangle} . \lambda e . \exists e_1, e_2 [P_1(e_1) \wedge P_2(e_2) \wedge e = e_1 \rightarrow e_2] \\ \text{b. } & \llbracket v_{man}^+ \rrbracket = \lambda P_{1\langle vt \rangle} . \lambda P_{2\langle vt \rangle} . \lambda e . \exists e_1, e_2 [P_1(e_1) \wedge P_2(e_2) \wedge e = e_1 \oplus e_2 \wedge \text{Manner}(e_1, e_2)] \end{aligned}$$

4.3 残った問題点

- 項構造を持たない語根を複合してから項を導入するというモデルは、語彙部門でなされていた項の同定をはじめとする複合動詞の際に必要な操作を削減することには成功している。
- しかし、一方で V1 と V2 の個々の動詞の特徴を複合動詞に反映させることは難しい。
 - 田中 (2024) で提案されている派生は、まず語根を複合したのちに複合された語根に応じて内項・外項が導入されていく
 - 複合動詞を1つの動詞としてカウントし、その複合動詞に合致した内項・外項を導入する。
- 例えば、§3.3 で見た、下位範疇素性や格素性が V1, V2 のどちらか一方しか反映されていないケースである。

(55) 「連れ去る」: V1 の下位範疇素性がアクティブ

- 太郎が保育所から子供を連れ去った
- 太郎が子供を連れていた
- *太郎が子供を去った

(56) 「言い負かす」: V2 の下位範疇素性がアクティブ

- 太郎が先生を言い負かした
- *太郎が先生を言った
- 太郎が先生を負かした

(57) 「歩き慣れる」: V1 の格素性がアクティブ

- 太郎は砂漠 {を/*に} 歩き慣れている
- 太郎が砂漠 {を/*に} 歩く
- 太郎が砂漠 {*/を/に} 慣れている

(58) 「乗っ取る」: V2 の格素性がアクティブ

- 政権 {を/*に} 乗っ取った。
- *電車 {*/を/に} 乗った
- 政権 {を/*に} 取った

- さらに、V1 と V2 の内項がどちらも具現化されるケースも語根を先に複合してから項の導入を行うモデルでは説明が難しい。

(59) その街を毎日魚を売り歩く

- a. その街を歩く
- b. 魚を売る

- まとめると、V1 と V2 のそれぞれの語彙的性質がどのように複合語に反映されるかに関しては、語彙部門を仮定しないモデルでは説明できないと言える。

5 まとめ

- 語彙的複合動詞は、V1 と V2 の間に多様な意味関係を持つ。
- 田中 (2024) に基づき、語根の複合とその後の項導入による分析を検討した。
- 本発表では、語根間の意味関係を表す v^+ の変種を導入し、
 - v_{caus}^+ : 〈手段〉・〈因果関係〉
 - v_{man}^+ : 〈付帯状況・様態〉
 によって V1 と V2 の意味関係を導出できる可能性を示した。
- この分析では、語彙部門で仮定されていた項の同定などの操作を削減することができる。
- 一方で、下位範疇素性・格素性・項構造など、V1・V2 個別の語彙的性質の継承は依然として説明が難しい。
- 語彙部門の廃止は理論的な単純化をもたらすが、語彙的複合動詞は依然として語彙情報の必要性を示唆している。

参考文献

- Anderson, Stephen (1992) *A-Morphous Morphology*: Cambridge University Press.
- Aronoff, Mark (1976) *Word Formation in Generative Grammar*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Baker, Mark C. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*: University of Chicago Press.
- Berwick, Robert C. and Noam Chomsky (2016) *Why Only Us?: Language and Evolution*, Cambridge, MA.: MIT Press.
- Bobaljik, D. Jonathan (2017) “Distributed Morphology,” in Aronoff, Mark ed. *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*: Oxford University Press.
- Carlson, Greg N. (1984) “Thematic roles and their role in semantic interpretation,” *Linguistics*, Vol. 22, No. 3, pp. 259–280.
- Champollion, Lucas (2017) *Parts of a Whole: Distributivity as a Bridge between Aspect and Measurement*, Oxford, New York: Oxford University Press.
- de Chence, Brent (2025) *The Boundary between Grammar and Lexicon: Evidence from Japanese Verb Morphology*: John Benjamins.
- Chomsky, Noam (1970) “Remarks on Nominalization,” in Jacobs, Roderick A. and Peter S. Rosenbaum eds. *Reading in English Transformational Grammar*, pp. 184–221, Waltham: Ginn.
- (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, MA.: MIT Press.

- (2001) “Derivation by Phase,” in Kenstowicz, Michael ed. *Ken Hale: A Life in Language*, pp. 1–52, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- (2008) “On phases,” in Freidin, Robert, Carlos P. Oter, and Maria Luisa Zubizarreta eds. *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essay in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, pp. 133–166, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- (2021) “Minimalism: Where are we now, and where we can we hope to go,” *Gengo Kenkyu*, Vol. 160, pp. 1–41.
- (2025) “The Miracle Creed and SMT,” in Greco, Matteo and Davide Mocchi eds. *A Cartesian Dream: A Geometrical Account of Syntax. In Honor of Andrea Moro*, pp. 17–40: Lingbuzz Press.
- Chomsky, Noam, T. Daniel Seely, Robert C. Berwick, Sandiway Fong, M. A. C. Huybregts, Hisatsugu Kitahara, Andrew McInerney, and Yushi Sugimoto (2023) *Merge and the Strong Minimalist Thesis*: Cambridge University Press.
- Elliott, Patrick D. (2020) “Elements of Clause Embedding,” Ph.D. dissertation, University College London.
- Embick, David (2015) *The Morpheme: A Theoretical Introduction*, Vol. 31 of Interface Explorations, Berlin, Boston: De Gruyter Mouton.
- Embick, David and Rolf Noyer (2008) “Distributed Morphology and the Syntax/Morphology Interface,” in Ramchand, Gillian and Charles Reiss eds. *The Oxford Handbook of Linguistic Interfaces*, pp. 284–324: Oxford University Press.
- Hale, Kenneth and Samuel Jay Keyser (1993) “On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations,” in Hale, Kenneth and Samuel Jay Keyser eds. *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, pp. 53–110, Cambridge, MA.: MIT Press.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1993) “Distributed Morphology and the Pieces of Inflection,” in Hale, Ken and Samuel Jay Keyser eds. *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, pp. 111–176, Cambridge, MA: MIT Press.
- Harley, Heidi and Rolf Noyer (1999) “Distributed morphology,” *GLOT International* 4, pp. 3–9.
- Jackendoff, Ray (1997) *The Architecture of the Language Faculty*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- (2002) *Foundations of Language*, Oxford: Oxford University Press.
- Kiparsky, Paul (1982) “Lexical Morphology and Phonology,” in of Korea, The Linguistic Society ed. *Linguistics in the Morning Calm*, pp. 3–91, Seoul: Hanshin Publishing Company.
- Kratzer, Angelika (2007) “On the Plurality of Verbs,” in Dölling, Johannes, Tatjana Heyde-Zybatow, and Florian Schäfer eds. *Event Structures in Linguistic Form and Interpretation*, pp. 269–299: Mouton de Gruyter.
- Levin, Beth (1985) “Lexical Semantics in Review,” *Lexicon Project Working Papers*, Vol. 1.
- Lohndal, Terje (2014) *Phrase Structure and Argument Structure: A Case Study of the Syntax-*

- Semantics Interface*, Oxford, New York: Oxford University Press.
- Matsumoto, Yo (1996) *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion ‘Word’*, Stanford: CSLI Publications.
- Nishiyama, Kunio (1998) “V-V Compounds as Seriarization,” *Journal of East Asian Linguistics*, Vol. 7, pp. 175–217.
- (2008) “V-V Compounds,” in Miyagawa, Shigeru and Mamoru Saito eds. *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, pp. 320–347, Oxford: Oxford University Press.
- O’Neil, Paul (2016) “Lexicalism, the Principle of Morphology-Free Syntax and the Principle of Syntax-Free Morphology,” in Hippisley, Andrew and Gregory Stump eds. *The Cambridge Handbook of Morphology*, pp. 237–271, Cambridge: Cambridge University Press.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, Cambridge, MA.: MIT Press.
- Ramchand, Gillian (2008) *Verb meaning and the lexicon: A first phase syntax*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Selkirk, Elizabeth (1982) *The Syntax of Words*: MIT Press.
- Zimmermann, Malte and Mary Amaechi (2025) “One, but not the same: on complex event-formation in Igbo serial verb constructions,” *Linguistics and Philosophy*, Vol. 48, pp. 213–264, DOI: <https://doi.org/10.1007/s10988-024-09412-w>.
- Zubizarreta, Maria Luisa (1987) *Levels of Representations in the Lexicon and in the Syntax*, Dordrecht: Foris.
- 大関洋平 (2023) 「分散形態論の概要」, 大関洋平・漆原朗子 (編) 『分散形態論の新展開』, 8–27 頁, 開拓社, 東京.
- 影山太郎 (1993) 『文法と誤形成』, ひつじ書房, 東京.
- (2013a) 「語彙的な複合動詞と補助動詞」, 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.6』, 285–301 頁, ひつじ書房, 東京.
- (2013b) 「語彙的複合動詞の新体系」, 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』, 3–46 頁, ひつじ書房, 東京.
- (2021) 『点と線の言語学』, くろしお出版, 東京.
- 田中秀治 (2024) 「分散形態論と語彙的 V-V 複合語の意味構成」, 岸本秀樹・日高俊夫・工藤和也 (編) 『レキシコン研究の新視点 —統語・語用と語の意味の関わり—』, 292–315 頁, 開拓社, 東京.
- 由本陽子 (1996) 「語形成と語彙概念構造—日本語の『動詞+動詞』の複合語形成について」, 奥田博之教授退官記念論文集刊行会 (編) 『言語と文化の諸相—奥田博之教授退官記念論文集—』, 105–118 頁, 英宝社, 東京.
- (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』, ひつじ書房, 東京.
- 由本陽子・杉岡洋子・伊藤たかね (2024) 『語の文法へのいざない』, ひつじ書房, 東京.
- 西山國雄・長野明子 (2020) 『形態論とレキシコン』, 第 9 巻, 最新英語学・言語学シリーズ, 開拓社, 東京.